

幼児教育施設での道徳性育成の方法に関する一考察

椋木香子

A Study about the Method to support the Moral Development of Children
in Preschool Education

Kyoko MUKUGI

1. はじめに

本論では、我が国の幼児教育施設での道徳性育成について、認知的発達理論の立場から示唆を得ることを目的とする。

我が国の学校教育において、心の教育の必要性が叫ばれるようになって久しいが、子どもの発達を考えるならば、そのスタートは乳幼児期にある。しかしながら、我が国においては教育・保育課程上、道徳だけを取り立てて指導することはない。幼児期においては、道徳性はその芽生えを培う時期と位置付けられ、子どもの生活や遊びの中での他者との関わりを通して培われるものであると考えられている。

一方で、その重要な契機となる子ども同士のけんか・いざこざへの対処については、基本的な指導・援助方法はあるものの¹、保育現場や保育者によって対応に違いがあったり、どう解決すべきかベテラン保育者でも悩むことがあったりしている。筆者が保育実習および幼稚園教育実習後に学生に行ったアンケートによれば²、実習で困ったことのうち、「けんかへの対応」が全体の2割弱を占めている。これらのことは、教育実践の特質上、個々のいざこざの状況が多岐にわたるために、対応もケース・バイ・ケースにならざるを得ないという事情にも拠るが、子どもの発達過程に即した指導方法が明確でないことも一因であると考えられる。つまり、何歳の子どもには何が善いこと・悪いことだと理解できているのか、理解できていないとすればどのように指導すべきなのか、といった議論が保育現場に十分浸透していないことを示していると考えられるのである。

道徳性の発達という観点を乳幼児期に援用する時、多くの示唆を与えると考えられるのが、構造主義に基づく道徳性発達理論とその教育方法に関する研究である。すでに我が国の小・中学校の道徳教育においても、その代表的な研究であるコールバーグの道徳性発達理論を取り入れた実践が行われている。コールバーグらの研究は主に青少年を対象としているが、Rheta DeVries & Betty Zan は幼児期に関してもコールバーグらの研究が多くの示唆を与えると指摘している³。

そこで本論ではまず、我が国の就学前教育において、道徳および道徳性がどのように取り扱われているかを、『保育所保育指針』、『幼稚園教育要領』及び『幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集』を中心に検討する。次に、現在行われている実践研究の中で、道徳性育成に関わると考えられる「思いやりが育つ保育実践」を取り上げ、その理論を概観した上で、構造主義に基づく

道徳性発達理論の視点を比較し、教育方法を考える際の必要性について論じたい。

2. 就学前教育における「道徳」および「道徳性」の捉えられ方

(1) 『保育所保育指針』・『幼稚園教育要領』における「道徳」および「道徳性」

我が国の就学前教育においては、「道徳性の芽生えを培う」とされ、道徳を直接取り扱うことや、道徳性そのものの育成が中心となることはない。まずは、道徳性の育成に関連する内容が、『保育所保育指針』・『幼稚園教育要領』においてどのように扱われているかを確認する。

『保育所保育指針』の中で道徳性と関連するものとしては、領域「人間関係」の中の「(ア) ねらい」の[3]「社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。」や、「(イ) 内容」の[9]「良いことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。」、[10]「身近な友達との関わりを深めるとともに、異年齢の友達など、様々な友達と関わり、思いやりや親しみを持つ。」、[11]「友達と楽しく生活する中で決まりの大切さに気付き、守ろうとする。」の項目が指摘できる。さらに、『保育所保育指針解説書』の「第2章 子どもの発達」には、乳幼児期の発達の特性として、「子どもは、大人との信頼関係を基にして、子ども同士の関係を持つようになる。この相互の関わりを通じて、身体的な発達及び知的な発達とともに、情緒的、社会的及び道徳的な発達が促される」⁴と述べられ、けんかなどの友達との関わりを通して、道徳性の芽生えが培われるとしている⁵。

同様に、『幼稚園教育要領』においても、領域「人間関係」の中の「1 ねらい」の(3)「社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。」、「2 内容」の(9)「よいことや悪いことがあることに気付き、考えながら行動する。」、(10)「友達とのかかわりを深め、思いやりをもつ。」、(11)「友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気付き、守ろうとする。」の項目がある。さらに、「3 内容の取扱い」の(4)では、道徳性の芽生えを培うにあたり、基本的な生活習慣の形成を図ること、他者とのかかわりのなかで他者の存在に気付き、相手を尊重する気持ちを持って行動すること、自然や身近な動植物に親しむことを通して豊かな心情を育むことが留意事項として挙げられている。特に、葛藤やつまずき体験を乗り越えることで、人への信頼感や思いやりの気持ちが芽生えることに配慮することも指摘されている。

以上のように、幼児教育施設での教育・保育内容としては、「道徳」や「道徳性」そのものについては扱わない。両者に共通するのは、「よいこと・悪いことに気付き、考えながら行動すること」、「思いやりをもつこと」、「きまりの大切さに気付き、守ろうとすること」である。これらが保育現場では「道徳性」もしくは「道徳性の芽生え」として捉えられていると考えられる。

しかし、当然のことであるが、「道徳性」が指し示す内容や道徳性の発達に関する事項は、『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』の上記以外の記述にも含まれると考えるべきである。『幼稚園教育要領』の「3 内容の取扱い」に端的に示されているように、道徳性が基本的生活習慣の形成や、他者や環境との関わりを通して育まれるからである。

(2) 『幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集』における「道徳」および「道徳性」

より詳細に幼児期の道徳性に関して述べているのが、文部科学省による『幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集』（以下、『事例集』と略記）である。これによれば、「道徳性の発達には、他者や社会と調和した形で自分の個性を発揮できるようになることである」⁶。社会のルールに合わ

せて自己を抑制することはもとより、人間として自分らしく生きる力が必要であり、自他双方の欲求の充足がより調和的に実現される方法を考えたり、よりよい社会にするためにルール等をつくることが人間には必要だということが述べられている。したがって道徳性の発達には、「他者と調和的な関係を保ち、自分なりの目標を持って、人間らしくよりよく生きて行こうとする気持ち」、「自他の欲求や感情、状況を受容的・共感的に理解する力」、「自分の欲求や行動を自分で調整しつつ、共によりよい未来をつくって行こうとする力」の3つが必要であると指摘されている⁷。

道徳性の基盤としては、基本的な信頼関係と基本的生活習慣の獲得が必要である。また、自他の分化の中で、反抗期なども経験しながら、自己意識・他者意識が形成され、他者への共感性や自己の欲求・行動の調整が行われていく⁸。

以上を踏まえた上で、『事例集』では幼児期の道徳性は次の3つの観点から捉えられている⁹。

第1に、他律的か自律的か、ということである。「幼児期は基本的に他律的な道徳性を持つ時期であるといわれる」¹⁰が、自律的な面ももつ、という。ここでは主に、ルールに対する認識について述べられているが、幼児が目に見える変化や自分にとって分かりやすい結果に基づいて良し悪しを判断する傾向にあると指摘されている。

第2に、幼児期の遊びとの関連である。遊びを通して、他者の気持ちを想像したり理解したりできるようになり、共感や思いやり行動ができるようになるということである。また、友達と一緒に遊ぶ中で、楽しく遊ぶためにはルールが必要ということを学ぶことになり、道徳性の発達に遊びが大きな意義を持つことが指摘されている。

第3に、調和的な人間関係と知的認識の発達との関連である。児童期以降の道徳性の発達が、抽象的思考や長期的視点等の獲得によって可能になる自他の視点の分化や関連付けを背景として、集団や社会の状況や特性を考慮できるようになる事を鑑みて、幼児期における道徳性の発達を考えるべきであることが指摘されている。先に挙げた道徳性の発達に必要な力である「他者と調和的な関係を保ち、自分なりの目標を持って、人間らしくよりよく生きて行こうとする気持ち」、「自他の欲求や感情、状況を受容的・共感的に理解する力」、「自分の欲求や行動を自分で調整しつつ、共によりよい未来をつくって行こうとする力」は、それぞれ、道徳性の動機付け、道徳性発達に影響を与える中心的要因、自己抑制力に関連することとして位置付けられている。

『事例集』から言えることは、乳幼児期が児童期以降の道徳性の発達において重要であること、その観点からどのような関わりが必要であると考えられるか、ということである。子どもの道徳性そのものについてではなく、ルールを守る、良し悪しを判断する、共感や思いやりを示すといったことが後の道徳性発達の土台となることが示されている。また、ルールを守ることや良し悪しの判断は他者との信頼関係に影響を受けることから、遊び活動や葛藤経験、人間関係や知的認識の発達が重視されている。

（3）就学前教育における「道徳」および「道徳性」の捉えられ方

『保育所保育指針』、『幼稚園教育要領』、『事例集』の記述から、就学前教育では「道徳」及び「道徳性」は次のように捉えられていると考えられる。

第1に、乳幼児期には「道徳性」の基盤が形成される時期であり、重要な時期ではあるが、「道徳性」そのものの発達は問題とされていないことである。したがって、「乳幼児期の道徳性」というと

きに何を意味するのか、明確でないと考えられる。

第2に、「よいこと・悪いことに気付き、考えながら行動すること」、「思いやりをもつこと」、「きまりの大切さに気付き、守ろうとすること」が「道徳性の芽生え」だと考えられていることである。このことは、どのようにしてそれらの諸能力が形成されるのかという問題を等閑視する可能性がある。つまり、例えば「きまりを守ること」が目標とされ、「きまりをどのように認識していくのか」という発達の視点が弱くなる恐れがあるということである。

就学前教育では「道徳」や「道徳性の発達」という概念自体はあまりなく、「よいこと・悪いことに気付き、考えながら行動すること」、「思いやりをもつこと」、「きまりの大切さに気付き、守ろうとすること」という人間関係に関わる内容が、それぞれ「道徳性の芽生え」として捉えられていると考えられる。しかし、この3つの内容を道徳性発達の観点から考えるならば、いくつかの疑問が出てくる。この3つの内容は幼児期に限られたことではなく、児童期以降でも発達課題となりうる。そのため、幼児期と児童期以降との違いをどのように捉えるか、幼児期の発達の特徴は何か、といった疑問が生じる。また、3つの内容に示されている力が幼児期にどのように形成されているのか、それらの力はどのような関係にあるのかといった問題も明確にしていく必要があるだろう。

3. 「思いやり」の構造

上記の3つの力のうち、「思いやり」に着目した研究が千羽らの研究グループによって行われている¹¹。この研究では、「思いやり」を「相手の立場に立って考え、相手の気持ちを汲む心」¹²と捉え、日本独特の心情であるとして、向社会的行動と区別している。その上で、多くの事例観察・調査研究を通して、「思いやり」の発達過程やその構造、「思いやり」の構成要因を抽出している。

それによると¹³、思いやり行動はまず、「自己受容」から出発し、葛藤を媒介とする「自己実現」を経て、「他者受容」へと発達していく。「自己受容」は「相手に気持ちを汲んでもらおうとする表出」である「自己主張」と、「情緒を素直に表現する表出」である「情緒の表出」から成る。ここから立場を逆転する「他者受容」に至るためには、「アイデアを豊かに表出」する「想像・創造」である「自己実現」を体験することが必要だと考えられている。「他者受容」においては、「相手の気持ちを汲もうすると表出」、「相手と気持ちを共有する表出」、「相手の心に積極的に関心を持つ表出」といった「相手の気持ちに共感」すること、「相手を援助しようとする表出」、「みんなと協力しようとする表出」、「相手との関係を深めようとする表出」といった「相手を援助・協力」することのカテゴリーに分けられている。

このような思いやりの観察項目を踏まえた調査から、千羽らは「思いやりの発達過程」の構造図を作成している¹⁴。主要な構成要素は「情緒の安定」、「自己受容」、「自己主張」、「葛藤体験」、「自己実現」、「気づき」、「他者受容」であり、それぞれの要素が相互的に影響を与えあっていることが示されている。

千羽らの研究は、「思いやり」という抽象的・感覚的概念を子どもの発達過程に即して構造化しており、多くの示唆に富んでいる。しかしながら、道徳性の他の側面である善悪の判断やルールの認識との関係については、検討の余地があると考えられる。

善悪の判断やルールの認識は、集団に対する意識や認識を含むため、他者受容だけでは説明でき

ない部分もある。また、状況に対する判断や認識の発達にも大きく影響を受ける。相手を思いやることがよいことであり、相手への思いからルールが形成され、ルールを守ろうとする態度が育つと推測されるが、相手を思いやることとルールが対立するような場合も考えられる。

また、道徳性の芽生えにとって重要な契機と考えられる葛藤体験についても、「思いやり」の発達の観点からは「自己受容」と「他者受容」の間の調整に焦点が置かれている¹⁵ため、他の認知的側面との関係は明確には取り上げられていない。

千羽らのグループは「思いやり」を日本独特の表現と捉え、これまで研究されてきた学習理論や認知的発達理論では説明しきれないと判断している¹⁶が、道徳性の発達全体を捉えるためには認知的発達理論の観点は不可欠であると考ええる。

4. 道徳性発達理論からの示唆

善悪の判断やルールの認識については、「他律から自律へ」と発達すると考えられており、幼児期においては自律的な部分もあるが、他律的な側面が強いと言われている¹⁷。他律概念と比較して自律概念を捉えるためか、自律の主體的側面が強調され、自分で良し悪しを判断したり、ルールを守ろうとしたりすることが自律的であると捉えられる傾向がある。しかし、道徳性発達理論では、「良し悪しを判断した基準は何か」、「ルールを守ろうと思った根拠は何か」を問題とし、それが他律から自律へと向かうことを示している。

このことは、きまりやルールについて指導する際に、その理由も含めて教えていくことの重要性の根拠を提示する。集団や社会の認識が十分でない幼児期においては、少なくとも他者の感情などを手掛かりとして、「なぜそのきまりがあるのか」を経験的に理解させていくことが求められるだろう。

しかし、認知的発達理論で重要なのは、それぞれの段階が構造的なまとまりをなしており、その質的な変容が発達と捉えられることである。つまり、「友達を叩いてはいけない」といった一つ一つの約束事をどれだけ理解しているかという数量の問題ではなく、その子どもがどのような判断基準や認知構造を持っているのかを問題とするのである。したがって、幼児の認知構造がどのように発達するのか、それを支援するためにはどのような教育方法をとるのかを検討する必要があるのである。

この点に関し、Rheta DeVries & Betty Zanはクラスに社会的道徳的雰囲気を作ることを提案している¹⁹。これは、コールバーグの「正義的共同社会 (Just Community)」のアプローチ²⁰に共通するものであり、集団や共同体などの道徳的雰囲気が個人の道徳性発達に影響するという考えに基づく。つまり、幼児期においても、クラスの中で道徳的雰囲気を作ることが、個々の道徳性の発達を促すと考えられるのである。

Rheta DeVries & Betty Zanの研究は、我が国の幼児教育施設における道徳性育成に対する論理的枠組みについて大きな示唆を与えると考えられる。これまで見てきたように、我が国の就学前教育における教育課程では、道徳性の育成は人間関係の一部として捉えられ、児童期以降の道徳性発達の土台という位置づけであった。道徳性の芽生えを培うことは重要であるという認識ではあるけれども、実質的には保育者の力量に委ねられており、教育方法を支える明確な理論があるわけではない。このような現状に対し、クラスに道徳的雰囲気を作るという視点は、就学前教育の教育課

程全体を捉え直すことにつながり、道徳性育成の位置づけの再検討を促すと考えられる。

5. おわりに

本論では、我が国の就学前教育における「道徳性」の捉えられ方を検討し、「道徳性の芽生え」の内容としての「よいこと・悪いことに気付き、考えながら行動すること」、「思いやりをもつこと」、「きまりの大切さに気付き、守ろうとすること」について、若干の考察を行った。就学前教育において道徳性の育成を促すためには、個々の約束事を子どもなりに理解させたり、思いやりを育てるだけでは不十分であり、構造主義に基づく道徳性発達理論の視点が必要であると考えられる。

今回の考察では、具体的な方法についての検討は行わなかった。というのも、Rheta DeVries & Betty Zanの研究の理論的背景についての検討が十分でなく、コールバーグ理論との関連も十分考察できなかった。また、教育方法だけを取り上げると、グループ活動や話し合い活動、係活動といった、我が国でも馴染みのある実践が取り上げられているが、我が国の取り組みとの違いや共通点についても十分検討する必要がある。これらの点は今後の課題としたい。

注

¹ 鈴木由美子・中尾香子・永瀬美帆・藤橋智子「子ども同士のいざこざを解決するための指導方法のあり方」広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第16巻、2010年、145-155頁、等、参照。

² Kyoko Mukugi, A view of Student Teaching to enhance practical ability for childcare – Mainly on the analysis of the questionnaires after on-the-job training–, Pacific Early Childhood Education Research Association 12th Annual Conference, August 1. 2011, 発表原稿、参照。

³ Rheta DeVries & Betty Zan. *Moral Classrooms, Moral Children – Creating a Constructivist Atmosphere in Early Education*. New York : Teachers College Press. 1994., p.281.

⁴ ミネルヴァ書房編集部編『保育所保育指針 幼稚園教育要領 解説とポイント』ミネルヴァ書房、2008年、66頁。

⁵ 同前書、66頁。

⁶ 文部科学省『幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集』ひかりのくに、2001年、2頁。

⁷ 同前書、2頁。

⁸ 同前書、2-5頁、参照。

⁹ 同前書、5-9頁、参照。

¹⁰ 同前書、5頁。

¹¹ 千羽喜代子他『思いやりが育つ保育実践』萌文書林、2005年。

¹² 同前書、10頁。

¹³ 同前書、16頁。

¹⁴ 同前書、19-20頁、参照。

¹⁵ 同前書、22-23頁、参照。

¹⁶ 同前書、26 頁。

¹⁷ 文部科学省、前掲書、5 頁。

¹⁸ J. ラマー他著・荒木紀幸監訳『道徳性を発達させる授業のコツ—ピアジェとコールバーグの到達点—』北大路書房、2004 年、50 頁。

¹⁹ Rheta DeVries & Betty Zan., *op. cit.*

²⁰ 日本道徳性心理学会編『道徳性心理学—道徳教育のための心理学—』北大路書房、1992 年、70 頁。